

平成 21 年 5 月 1 日現在

研究種目：若手スタートアップ

研究期間：2007～2008

課題番号：19820034

研究課題名（和文） ヴェネディクト・エロフェーエフの創作と後期ソヴィエトの文化

研究課題名（英文） Venedikt Erofeev's Works and Late Soviet Culture

研究代表者

神岡 理恵子 (KAMIOKA, Rieko)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：10454000

研究成果の概要：二年間の研究期間を通じ、ヴェネディクト・エロフェーエフという作家の創作初期から中期に該当する部分の資料収集と研究をとりわけ重点的に行なった。その成果の一部は二本の研究論文で発表済みである。またロシア国立図書館および作家の故郷にあるエロフェーエフ博物館での資料収集・閲覧と、関係者への聞き取り調査を実施し、今後の研究継続にも有効となるロシアの研究者たちとの研究協力体制を構築した点も大きな成果であった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	460,000	0	460,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,360,000	270,000	1,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ語系文学

キーワード：ロシア文学、ロシア文化、ポストモダニズム、文学理論、ソヴィエト文化、地下出版、アンダーグラウンド文化、カウンター・カルチャー

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する背景には、20 世紀後半のロシア文学、とりわけ散文の分野を、「ロシア文学史」という従来の文脈内での考察から一歩出て、同時代の世界の文学・文化・社会との関係のなかで捉え直したいという長期的な研究計画があった。この研究を進めてい

くに当たってまず足がかりにしたいと考えたのが、本研究「ヴェネディクト・エロフェーエフの創作と後期ソヴィエトの文化」である。

ソヴィエト崩壊と同時に 1990 年代から活況を呈し始めたロシアの文学は、現在「ロシア・ポストモダニズム文学」、「探偵／ミステリー文学」、「女性文学」などを中心にかなり研究が進められている。ロシア・ポストモダ

ニズム文学の萌芽は 1970 年前後とされており、なかでもロシア・ポストモダニズム文学の「原初テキスト」と見なされているのが、ヴェネディクト・エロフェーエフ（1938-1990）の代表作『モスクワ - ペトゥシキ』（1969-1970）である（ボグダノフ著『ロシア・ポストモダニズム文学の原初テキストとしての「モスクワ - ペトゥシキ」』、2002 年などを参照）。

従来のこの作家の研究は、世界十数カ国で翻訳され国内外でカリスマ的な人気を誇るこの代表作にほぼ集約されており、この代表作が現代ロシア文学のなかで果たした役割や重要性が多大なものであったことは、現代ロシア文学史研究においては十分認識されている。従ってこの作家の創作活動を概観することは、ロシア・ポストモダニズム文学や現代のロシア文学研究には不可欠かつ有効であると思われる。

しかしながら実際、この作家の創作活動の全貌は、死後 20 年近く経とうとする現在に至っても未だ明らかになっていない部分が多く、研究も代表作一点に極端に集中しているという状況が続いている。近年、こうした状況を憂えるロシアの若い研究仲間が中心となって、散逸していた処女作や膨大な量の創作ノートやテキストの整理がなされ、順次刊行され始めた。それと並行して、作家と親交のあった人物らの回想録も複数出版され始めている。

従って、これまで代表作以外の研究を継続して行なってきたことを活かしながら、先駆的な研究成果をあげるためにも、こうした機を逃さずに本研究を進めることが重要だと思われたため、最新の資料を参照しながら研究を開始した次第である。

2. 研究の目的

ヴェネディクト・エロフェーエフの創作活動は 1950 年代後半から 1990 年までであり、スターリン以後のソヴィエト後期に当たる時代をほぼ全域カバーしている。作家エロフェーエフは、「社会主義リアリズム」に代表されるような、当時のいわゆる「公式文学」に抵抗し、アンダーグラウンドで創作を行ないながら、文学者や知識人層など文化人たちの間では早くからカリスマ的な存在となっていた。彼の創作活動と、この時代の社会・文化状況との関わりを明らかにすることは、現在に至るロシア（・ポストモダニズム）文学を考える上では必要不可欠であると思われる。

しかしながら、この時代の文学、とくに散文の研究は、20 世紀初頭やスターリン時代のものと比べても、また同時代の詩の研究と比

べても、あまり進んでいる分野だとは言い難い。現在の 20 世紀ロシア文学・文化研究の動向は、世界的に見てもまず世紀初頭のモダニズム、アヴァンギャルドの研究、スターリン期の 30 年代のものが中心的であり、それ以後はベレストロイカ以降の 20 世紀末から現代の文学に関心がもっぱら集中しがちな傾向がある。

近年ロシア国内で、ソヴィエト後期の文化に関するアーカイヴや、文化人らの回想録などが次々と出版されている状況を考えると、この時代のより詳細な研究を行なう環境がようやく整いつつあると考えられる。それと同時に、当時から活動する作家や芸術家など、当事者たちの世代交代が起こっているため、彼らから直接情報を収集するためには、急がなければいけないという時期に差し掛かっているという現状もある。

本研究が目的とするエロフェーエフという作家の詩学の解明は、20 世紀ロシア文学におけるこうした沈黙の部分の解明していくことでもあるだろう。そのため本研究は、スターリン死後も公式には提唱し続けられた「社会主義リアリズム」の裏で、いかに独自の創作や文化活動が可能であったのか、そして 20 世紀後半の社会主義体制下で、高度資本主義社会で可能となったような「ポストモダニズム文学/文化」の誕生がいかに可能であったのか、といった点の追究も目的としている。

従って、本研究は、同時代の社会、文化、政治経済、歴史なども参照する総合的な視点から、作家の創作の全貌を明らかにすることで、20 世紀後半のソヴィエト＝ロシアの非公式な、アンダーグラウンドの、いまだ知られざる文化・社会状況を明らかにしていくことである。

なかでもとりわけ本研究で重点的に明らかにしたいと考えているのは、これまで継続して行なってきたエロフェーエフの創作研究を完成させるために不可欠な部分、すなわち創作活動の前期～中期の部分（1950 年代末～1970 年代）である。

3. 研究の方法

具体的な研究の方法は、大きく分けて（1）資料の収集と整理、（2）資料・作品の読解と意味づけ、（3）当時の国内の文化状況および世界的な文化の文脈における位置づけ、（4）研究成果の公表、という手順で実施した。

（1）に関しては、国内で入手できないものは主にロシア国立図書館で収集にあたった。とくに、ロシア国内の地方都市などで刊行されている雑誌や学術論文集などの資料

収集は、ロシア国立図書館で収集を実施した。同様にロシア国内の学位論文は、現在同図書館でのみ閲覧・複写可能なため、同図書館での収集を行なった。

そのほか作家の故郷にあるエロフェーエフ博物館での資料収集を実施した。このエロフェーエフ博物館では、国外の関連新聞記事や地下出版の刊行物、作家の所持品など、ここでしか閲覧できないものもあるためである。

また(2)(3)の段階においては、2で述べた本研究の目的を遂行するため、同時代の政治、文化、社会状況なども参照する総合的な視座が必要となってくることに留意しながら、資料を分析する姿勢をとった。

そのほか、現在のロシア内外の研究者たちとの情報交換や、作家周辺の人物、ソヴィエト後期から現在にわたり活動する文学者、芸術家たちからも積極的に情報収集を行なうという方法もとった。(4)は主に研究論文の発表という形で実施した。

また2の終わりで述べたように、本研究が重点的に取り扱おうとしている創作活動の前期～中期の部分(1950年代末～1970年代)について、実際の作品を例にとりながら、より具体的に見ていくと、この時期には代表作『モスクワ - ペトゥシキ』のほか、処女長編『精神異常者の日記』(1957 - 59)、短編『悦ばしき知らせ(福音)』(1962)、短編『ある奇人の目で見えたワシーリイ・ローザノフ』といった作品が存在する。これらはほとんど先行研究がないため、作品の読解が何よりもまず重要になってくる。これは冒頭で挙げた(2)の研究方法に該当する。

そしてそれらが執筆された当時のソヴィエト国内の時代状況を見ていくと、『精神異常者の日記』、『悦ばしき知らせ(福音)』においては、フルシチョフ政権下に起こった「雪どけ」とその文化状況と大きく関係している。従って、「雪どけ」期の政治、社会、人々の生活なども調査していくという方法が重要となった。

同様に、代表作『モスクワ - ペトゥシキ』においてはロシア・ポストモダニズム文化の萌芽という問題、短編『ある奇人の目で見えたワシーリイ・ローザノフ』においてはブレジネフ政権下で「停滞」といわれた時代状況、さらに1970年代から興隆したアンダーグラウンド文学・芸術の問題などにも関連づけて考察し分析を行なっていくという方法である。これは研究方法(2)(3)に該当する。

(4)の研究成果の公表については、主に研究論文という形でまとめた。作家の代表作以外の研究は、ロシア国内外においてもほとんど見られないため、個々の作品ごとに關する論考の段階でも、論文発表を行なった。

4. 研究成果

二年間の研究期間を通じて、とくに作家の創作初期から中期に該当する時期(1950年代末～1970年代)の資料収集および研究を特に重点的に行なった。

資料収集に関するもっとも大きな成果は、作家の故郷であり、ロシアの北極圏に位置するムルマンスク州キーロフスク市のエロフェーエフ博物館で、資料の閲覧と収集を実施したことである。そこでこれまでロシア国立図書館にもなかった資料や作家の所持品、大学以前の教育課程における資料、「サミズダート」「タミズダート」と呼ばれる地下出版物、国外での新聞記事、彼の作品に基づいた演劇作品に關する資料などを多数、閲覧・収集することができた。

それ以外にも、エロフェーエフ研究者である館長のエヴゲーニイ・シターリ氏に聞き取り調査と意見交換を行なった。相互の資料提供や今後の調査、研究協力を約束した点も、大きな収穫である。

またこのキーロフスク市への研究出張により、北極圏という現地の厳しい気候風土、さらには鉱山に四方を取り囲まれ、戦後炭鉱の町として開拓されたという地理歴史的な脈を実際に体験したことは、それまで理解が難しかった初期作品『精神異常者の日記』の読解と分析に大いに役立った。この作品は、当地を舞台にした作品であり、そこでの文化や風俗、気候風土が数多く描写されているからである。この作品に關する論考は、現在準備中であり、近いうちに発表できればと考えている。

そのほか、ロシア国内で近年発表された学位論文を中心に、ロシア国立図書館で三回にわたって資料収集を実施したほか、ソヴィエト後期から活動する作家や現代美術家への聞き取り調査も二回実施した。これらの調査で入手した資料や情報は、5で挙げる研究論文のなかで成果としてまとめられている。

なかでも5 - の論考「遅れてきた「雪どけ」詩人たち 非公式文芸サークル《

(スモーグ)》の活動をめぐって」

では、エロフェーエフに關連して収集を続けてきた資料を使用してまとめた論考である。エロフェーエフと同時代の地下文化、特に若者を中心とした地下の創作文化を考察したことは、今後、この時代の研究を行なうことの必要性をあらためて確認するものであった。またこのほかにも作家の初期作品『悦ばしき知らせ(福音)』に關する論考を行なったので、発表できるように準備している。

一方5 - の論考、「ドラマ」への欲望、あるいは「自己増大するロゴス」 ヴェネディクト・エロフェーエフ『反体制派、ある

いはファニー・カブラン』は、2007年の秋からスタートした早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプロジェクトでの研究員としての活動とも関連するものである。

このプロジェクトでは、エロフェーエフの1980年代創作とロシア・ポストモダニズム演劇の関係をはじめ、戯曲作家としての側面を中心に考察を行なった。本研究とも連動しながら、有効な研究活動を実施することができた。論考で扱った作品は、これまでまったく取り上げられてこなかった未完の戯曲であり、エロフェーエフ研究界においても、先駆的な成果として残すことができたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

神岡理恵子

遅れてきた「雪どけ」詩人たち 非公式文芸サークル《 (スモーグ) 》の活動をめぐって

早稲田大学大学院文学研究科紀要 第54輯 第2分冊 2008、175-188。査読あり

神岡理恵子

「ドラマ」への欲望、あるいは「自己増大するロゴス」 ヴェネディクト・エロフェーエフ『反体制派、あるいはファニー・カブラン』

早稲田大学演劇博物館グローバルCOE 紀要演劇映像学 2007 第2集、229-246。査読あり

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神岡 理恵子 (KAMIOKA RIEKO)
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号：10454000

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし